

協力隊に応募。2010年からセネガル地方部の村で活動を始めた。「私は、村落開発普及員」として、日々、バイクで村々を回りながら養蜂と蜂蜜の販売を支えています。セネガルは政治的に安定していることから多くの国が開発プロジェクトを実施しており、若宮さんは開発コンサルティング企業の職員に話を聞くなど、積極的に国際協力の現場を学んだ。

「私はセネガルで、どんな仕事でも全て何らかのかたちで社会の役に立っているのだと実感しました。若宮さんの赴任先の村では、苗木を売り歩く人や、他の地域から配管をつなげて村に水道を引く作業をする住民がいた。『その一つ一つは個人の『なりわい』ですが、苗木売りは森林保全、配管工は上水道整備の一翼を担っているわけですね。彼らは、いつ、どこで、誰に何を売るかなども自分で考えて商売をしていました』。村人の頼もしい姿に、若宮さんは感心した。

さらに、村人との活動の中で、国際協力では取り組みが小規模であるほど、外部からの支援より現地の人が自らの手で地域を良くしていく力が重要であることにも気が付いた。これらの発見は、できるだけ現地の人々に近いローカルな国際協力の現場に留まることを考えていた若宮さんの将来構想に変化を与えた。

さらなる転機が滞在1年目の終わりに訪れる。「休暇中にセネガルの沖の島に旅行に行きました。そのとき泊まったゲストハウスはオーナーの自宅を兼ねた温かみある宿で、不意に『これこそ次の目標だ』と思ったんです。ゲストハウス業は、旅行者としても外国を訪れることの多かった若宮さんの海外経験を生かすことができ、自分で時間を管理しながら事業を進められる点も魅力だった。こうして若宮さんは、地元高松市でゲストハウス業を営むという新たな目標に向かって歩き始めることとなった。

さらなる転機が滞在1年目の終わりに訪れる。「休暇中にセネガルの沖の島に旅行に行きました。そのとき泊まったゲストハウスはオーナーの自宅を兼ねた温かみある宿で、不意に『これこそ次の目標だ』と思ったんです。ゲストハウス業は、旅行者としても外国を訪れることの多かった若宮さんの海外経験を生かすことができ、自分で時間を管理しながら事業を進められる点も魅力だった。こうして若宮さんは、地元高松市でゲストハウス業を営むという新たな目標に向かって歩き始めることとなった。

満足度目指した先の 地域貢献

若宮さんは、持ち前の行動力で、セネガルにいたるうちからインターネットで高松市にある工務店の情報を調べ、簿記の勉強も始めた。任期を終えて帰国すると、すぐに地元のホテルに就職。夜勤でフロント業を学ぶ傍ら、日中は開業準備を進めた。こうした努力の末、帰国の翌年には、和風の「ゲストハウス若葉屋」がオープンした。

「お客さんとおしゃべりをしながら、お客さんの好みや予算、その日の天気も考慮に入れ、一人一人に合わせた旅先の提案をしています」。だからこそ、「2泊目は若葉屋ではなくて、瀬戸内海の島で

泊まってみてはどうですか」と提案することもあったという。

宿泊客の満足度を最優先する若葉屋は、実は若宮さん自身の満足度を追求した宿でもあった。1歳になる息子の父親でもある若宮さんは、家族との生活を第一に考え、自宅併設型のゲストハウスにこだわった。接客の合間に息子をお風呂に入れることも日常茶飯事だ。セネガルの村人のように、何より家庭を大事にしたい。今、思い描いていた生活が実現している。

国内外から多くの人が集まる若葉屋は、高松市の観光交流課からも職員が視察に訪れるなど、町づくりを担う重要な観光アクターとして、期待を寄せられている。高松市は、各方面で活躍している地元の若い世代を交えて町づくりを検討する「高松市創造都市推進懇談会」を主催しており、若宮さんはその委員も務めている。

「グローバル人材というと、海外に出て行く人を連想しがちですが、外から来た人を内側で受け止める人間も必要ですよ。それはゲストハウス業を始める前は、気付かなかったことだった。『ゲストハウス業という私の『なりわい』が、結果として大好きな地元の振興や人々の交流促進につながればうれしいです』。そう語る若宮さんは「今が幸せです」と付け加えてほほ笑んだ。



妻の裕香さん、息子の幸太郎ちゃんと。若葉屋は、古民家の建具をあしらひ、個室には畳と和紙、柱や床には四国産の木材を用いた落ち着いた和風ゲストハウスだ



1階の個室。若葉屋では小さな子どもを連れたお客さんも歓迎している



自転車で大阪から旅をしている小学校教員の池内諒さん。翌日からの旅のルートは、若宮さんにアドバイスをもらいながら決めた

セネガルで見つけた 自分の生き方

青年海外協力隊としてセネガルで活動した若宮武さん。現地での経験と持ち前の行動力を生かし、帰国後は地元の香川県高松市に「ゲストハウス若葉屋」を開業。地元と家族をこよなく愛するオーナーの素顔に迫った。

国際協力の現場で見つけた目標

「子どものころから、海外には強い関心がありました。そう語る若宮さんは、中学生のとき、英語教師の提案がきっかけでガーナに住む同年代の子と国際文通を始めた。大学時代には、その友達を訪ねてガーナまで行ったという。若宮さんにとって初めての開発途上国は、『友達に住む国』だった。

将来は開発援助に携わる仕事に就きたいと希望していたことから、大学院進学も考えていたが、悩んだ末、まずは民間企業で社会人経験を積むことを決めた。

商社の営業職として3年間勤務した後、会社を退職して青年海外



ドミトリーに宿泊していたデンマーク人のアナ・マッツェンさん。四国八十八カ所を巡るお遍路が旅の目的だという

若宮さんの一日

扉の向こうの
自宅から出社
チェックイン時に
旅のプランの提案を
することも

- 00:00 就寝
- 23:00 施錠。会計作業、掲示物作り、翌日の予約の確認など
- 22:30 最終チェックイン
- 17:30 幸太郎ちゃんのお風呂、仕事の合間に夕食
- 15:00 チェックイン開始、幸太郎ちゃんと遊ぶ
- 10:00 ゲストハウスの掃除、買い物など
- 7:00 起床。新規予約の確認、家族と朝食、チェックアウト業務など

若宮 武 WAKAMIYA Takeshi
大阪外国語大学（現、大阪大学）開発環境専攻。民間企業に3年間勤務した後、青年海外協力隊としてセネガルで活動。帰国後、地元香川県のホテルでフロント業務を学び、高松市で「ゲストハウス若葉屋」を開業。